

性の推移を検討した。1989, 91, 93, 94年を調査年度とした。黄色ブドウ球菌平均検出数は59, 平均検出率は9.1%であった。ディスク法では MRSA は91年に減少しその後増加した。DMPPC 高度耐性菌は入院株で45.3から74.1%へ外来株で1.0から24.4%へ増加した。MICでは入院株で MRSA は91年に減少したが93年に増加し, 94年には50%で, 外来株では経年的に増加した。CEZ耐性菌は MRSA とほぼ同様の推移を示した。MINO 耐性菌は, 91年から20%以下に減少した。IPM 耐性菌は入院株で91年に消失したが93年に再増加し, 93年からは外来株にも出現し94年には30%と近年増加傾向にあった。今後この集計を診療科, 検体種, 病棟, 患者背景などで分類し再検討する予定である。

### 3) オウム病が疑われた器質性肺炎の1例

勝井 郁・松田 正史  
鈴木 康稔・関根 理 (水原郷病院内科)

63歳, 男性. 職業は養鶏業. インコ, 九官鳥も飼育. 主訴は乾性咳嗽, 全身倦怠感. 胸部レ線で両側に一部斑状陰影を伴うスリガラス様陰影を認め, HRCT で抹消に強い両側びまん性の肺野濃度上昇と小葉中心性陰影を認めた. ミノサイクリン 200 mg/日の内服で胸部陰影は改善せず. C. psittaci 抗体価は陰性で, 末梢血好酸球増多を認めたため, BAL, TBLB を施行. BAL 液はリンパ球71%, マクロファージ16%, 好中球10%, 好酸球1%で, OKT 4/8比は0.17と低値を示した. TBLBでは急性間質性肺炎を伴う器質性肺炎との病理診断を得た. プレドニゾロンで胸部陰影は消失した. 病理所見, 臨床経過から過敏性肺臓炎, 中でも鳥飼病が最も疑われ, 環境誘発試験, 沈降抗体法などの血清学的検査で診断を確定する予定である.

### 4) 高齢者における眼感染症の検出菌

宮尾 益也・本山まり子  
阿部 達也・笹川 智幸 (新潟大学眼科)  
大石 正夫 (信楽園病院眼科)

【目的】近年, 高齢者人口は増加し, 眼科領域においても老人患者の急増を認める. 今回, 眼感染患者の検出菌を年齢別に検討した.

【方法】1987年~1993年に当科で眼感染症患者より検出された菌を対象とし, 疾患別および年齢別に検出頻度を検討した.

【結果】1) 736名中50歳以上が, 46.5%を占めた. 2) 1,764株が検出され, グラム陽性球菌 (GPC) 46.0%, 嫌気性菌 21.1%, グラム陽性桿菌 (GPR) 17.2%, グラム陰性桿菌 (GNR) 9.8%であった. GPC 811株中, CNS 52.2%, S. aureus 21.1%,  $\alpha$ -streptococcus 17.5%であった. GPR 304株中40.1%が Corynebacterium であった. GNR 172株中非発酵菌 55.8%, H. influenzae 19.2%であった. 3) 眼瞼炎, 慢性涙嚢炎, 角膜感染症, 術後感染は高齢者に多く認めた. 4) S. pneumoniae, Haemophilus は10才以下に多く, CNS, S. aureus 非発酵菌は各世代で検出された. 5) 50歳以上では S. aureus の43.1%が MRSA であった.

## 一 般 演 題 II

### 5) Sparfloxacin の肺抗酸菌症治療への応用の可能性

吉川 博子・青木 信樹  
薄田 芳丸 (信楽園病院内科)

【目的】Sparfloxacin (SPFX) は抗酸菌に対して強力な抗菌活性を有している. 抗酸菌症治療への応用の可能性を検討した.

【方法】#1 肺結核及び肺非定型抗酸菌症の症例に SPFX を処方した. #2 SPFX の喀痰中濃度のピーク値を抗酸菌に対する MIC80 で割った値について検討した. #3 抗酸菌症の患者に SPFX 200 mg を隔日投与し, 本剤の血中濃度を経時的に測定した.

【結果】#1 炎症反応は改善し, 菌は陰性化した. #2 SPFX の喀痰中濃度のピーク値は M. avium complex, M. tuberculosis の MIC80 に対して, それぞれ5.4, 168と良好な値を示した. #3 腎機能正常者で SPFX 隔日投与にて, 十分な血中濃度を示し, かつ蓄積も認められなかった.

【考察】SPFX は肺抗酸菌症の治療に有用であると思われたが, 比較的高齢者に多い疾患であり, より安全に長期間使用するためには低用量での使用が検討されるべきであると思われた.

### 6) 急性虫垂炎症例に対する化学療法の検討

川口 英弘・石川 裕之 (巻町国民健康保険  
病院外科)

過去約7年間に当科で経験した急性虫垂炎症例190例を対象に, 投与された抗生物質の有効性を入院期間, 入

院費ならびに創感染合併率の面から検討した結果つぎの結論を得た。1) 手術例においては、セフェム系1剤を投与した群に比し、ホスホマインを投与した群では重症例が多いにも拘らず、入院期間、入院費ならびに創感染合併率に差を認めなかった。2) 保存的治療例では、セフェム系1剤を投与した群に比しホスホマイシン(土ミノサイクリン)を投与した群では、入院期間ならびに入院費に明かな差を認めなかった。以上より、ホスホマイシンはセフェム系抗生物質と同等もしくはそれ以上の有用性が期待できると考えられる。

#### 7) ステロイド・パルス療法42例における重症感染症の検討

石塚 修・塚田 弘樹  
瀬賀 弘行・近 幸吉  
五十嵐謙一・和田 光一  
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

【目的】ステロイド・パルス療法(以下パルス療法)は、膠原病、腎疾患、血液疾患、呼吸器疾患において、その治療の有効性が認められている。しかし、その免疫抑制作用のため多彩な感染症を呈することが知られている。私達は、当科で行ったパルス療法後に於ける感染症の詳細について検討した。

【方法】対象は、1986年より6年間に、当科においてメチルプレドニゾロン 1000 mgx 3日間、500 mgx 3日間のパルス療法を行った42症例である。疾患の内訳は、膠原病21名(SLE 17名、MRA 2名、PN 1名、MCTD 1名)、腎疾患5名(ネフローゼ症候群4名、腎移植後1名)、血液腫瘍疾患4名、呼吸器疾患11名(特発性間質性肺炎急性増悪6名、パラコート肺臓炎2名、薬剤性肺臓炎2名)、皮膚疾患1名であった。パルス療法後1カ月以内に生じた、呼吸器、尿路、皮膚、全身感染症について調査した。

【結果】呼吸器感染症13名(細菌性肺炎8名、カリニ肺炎3名、サイトメガロウイルス肺炎3名)、尿路感染症5名(腎盂腎炎1名、膀胱炎4名)、皮膚感染症3名(Herpes zoster 1名、Herpes simplex 2名)、敗血症

4名を認めた。特に、緑膿菌敗血症の経過は急激であった。また、カリニ、サイトメガロ等の compromised host にみられる感染症も高頻度に見られ、その予後も不良であった。

【考察】パルス療法を行う際、通常の感染症対策を行った上で、緑膿菌への早い対応、カリニ肺炎に対して pentamidine あるいは ST 合剤による予防法の確立が必要なることが示唆された。

#### 8) GBS(B群溶連菌)が関与したと思われる後期流産に対する抗菌療法

有波 良成・関塚 直人  
長谷川 功・高桑 好一 (新潟大学産科  
田中 憲一 (婦人科))

後期流産の原因としては頸管無力症がよく知られているが、一方最近腔・頸管からの上行性子宮内感染が後期流産・早産の発生に重要な役割を果たしていることがわかってきた。感染を原因とする流産は散発的にみられるのが一般的だが、我々は共通する臨床の特徴(1. 陣痛先行の反復性後期流産、2. 予防的頸管縫縮術や子宮収縮抑制剤が無効、3. 頸管内に GBS が持続的に陽性を示し、流産時 CRP が高値を示した)を持つ4症例を経験し、頸管内に持続的に存在していた GBS が妊娠中期に上行性子宮内感染を起こし流産を反復したものと推察された。これらに対して GBS をターゲットとした抗菌療法(非妊時より ABPC 経口・CP 腔坐で GBS 陰性確認後妊娠を許可し、妊娠中 GBS 陽性時抗生剤投与・イソジン腔洗を追加)を試み、妊娠した3症例のうち2症例に妊娠継続期間の延長を認め、生児を得た。

## II. 特別講演

産婦人科領域における感染症の最近の話題

山形大学医学部産科婦人科学教室助教授

千村 哲朗 先生